

# ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [2]

キケロ『老境論』より — 「格変化」をめぐって —

秋山 学

キケロの名文を素材とした羅仏比較文法の二回目は、『老境論』（前44年作）が素材です。さっそく、作品冒頭近くからキケロの文章に触れてみることにしましょう。

**原文** Nunc autem mihi est visum de senectute aliquid ad te conscribere. Hoc enim onere, quod mihi commune tecum est, aut iam urgentis aut certe adventantis senectutis et te et me etiam ipsum levare volo. Etsi te quidem id modice ac sapienter, sicut omnia, et ferre et laturum esse certo scio. Sed mihi, cum de senectute vellem aliquid scribere, tu occurrebas dignus eo munere quo uterque nostrum communiter uteretur.  
— De senectute, 1-2.

**仏訳** Aujourd'hui, j'ai cru bon de t'écrire quelque ouvrage sur la vieillesse. En effet, de ce fardeau que la vieillesse nous impose à tous deux en commun par son attaque ou du moins son approche, je veux que tu sois soulagé ainsi que moi-même. Il est vrai que toi, tu le supportes et le supporteras avec mesure et sagesse, comme toutes choses, j'en suis sûr. Mais, comme je songeais à écrire quelque ouvrage sur la vieillesse, tu m'apparaissais digne d'un présent dont nous puissions user en commun l'un et l'autre.

**訳** さていま、私は老境に関してあなたに何か書き送ることにした。なぜならこの重荷は私にとって、あなたと共有しているものであり、この老境がすでに圧力に満ちているにせよ、少なくとも差し迫ったものであるにせよ、あなたが、そして私自身が、その重荷から逃れられるように私は望むからである。もちろん私は、あなたがすべての事柄と同様、慎ましくかつ賢明に、この重荷に耐えていること、そして今後もそうであろうことを良く知っている。ただ老境に関して記そうと望んだ際、我々の双方が共に甘受しているこの務めに関して、あなたが相応しい人として思い浮かんだのだ。

今回も、① 不定法に従える構文（visum est; volo-vellem; scio）、② 奪格の用法～  
1) 離脱の意味（onere... levare）、2) 形容詞の支配（dignus）、3) 動詞の支配（uteretur）、

③ 現在分詞（urgentis; adventantis）、④ 対格主語＋不定法（et te et me... levare; te... et ferre et laturum esse）⑤ 関係文中の接続法（quo... uteretur）など、かなり重要な文法事項が含まれています。今回は「格」という項目について考えてみましょう。

フランス語を学ぶ方にとって「格」というカテゴリーは、英語でもほぼ失われているために、耳慣れないものだと思います（ドイツ語では初歩の段階で叩き込まれますね）。もっともフランス語の母語に当たるラテン語には、ドイツ語やスラブ諸語、ギリシア語やサンスクリットなどと同様、「格」のカテゴリーが存在します。

印欧語の文法は、大別して「名詞類」（名詞、形容詞、代名詞など）と「動詞」とを文法上の2つの核にしています。後者の語形変化は「活用」と呼ばれ、法・時制・態、それに数と人称が関係します。一方前者の変化は「曲用」と呼ばれることがありますが、この表現は特に格変化を伴う言語に適するものとも言えます。「曲用」とは性・数・格による変化を指すわけですが、フランス語に関して言えば、名詞類に「性」と「数」に伴う語尾変化は見られるものの、格に伴う語形変化は代名詞を除き失われています。

この「格」で表現されるのは、ちょうど日本語の「格助詞」が果たすのと同じ文法概念だと言えるでしょう。つまり「～が」（主格）、「～の」（属格）、「～に」（与格）、「～を」（対格）、「～から」（奪格）といった、いわば名詞の「身分」「意味合い」に関する表現をめぐり、日本語ではこれを当該の名詞の後に「格助詞」を付して表しますが、多くの印欧語では、当該の名詞そのものの語尾を変化させて表現します。これが「格変化」と呼ばれる現象となるわけです。ちなみに、ハンガリー語などの非印欧語では、文法上「格変化」という範疇でこの現象を扱うものの、実際には、ちょうど日本語における格助詞を付した語形全体を、ある「格」形と定めているようなケースが見られます（その結果、格の数は増えます）。なおラテン語文法には、上掲の5つの格のほかに「呼格」があり、主格と呼格以外の4つの格を「斜格」と総称しています。

フランス語や英語では、この「格変化」で表現されるべき意味内容を、名詞の語形を一定のものにしたうえで、その前に「前置詞」を補って表していると言えます。ラテン語やギリシア語にも前置詞は存在しますが、その前置詞が、後続する名詞にやはり一定の格形を要求します。ただサンスクリットでは、上掲のラテン語の6つの格以外に「～によって」（具格）、「～において」（地格）の語形が別に存在し、格変化させた名詞を順次置いてゆくことで文意が構成され得るため、前置詞の頻度はそれほど高くありません。なお具格と地格の用法は、ラテン語では「奪格」に吸収されています。つまり、カバーすべき名詞の「意味合い」は古典語から現代語にかけて変わらないわけですが、言語は、その変遷上「語形変化の多様性と複雑さを可能な限り回避する方向に進む」という一般的傾向を、ここに認めることができるかも知れません。

（あきやま・まなぶ）